南砺市立福野小学校　校長だより

校長室の窓から

令和５年度　第１８号　１２月４日

冬本番、間近・・・

１２月になりました。先週末には、校庭の樹木に雪囲いが施され、東の山も雪化粧をし始めました。校長室の窓から見える景色がずいぶん冬らしくなってきました。

さて、学校では、学期末ということもあり、各教室では２学期に学習した内容を確かめるテストや総合的な学習の時間で学んだことのまとめ等が行われています。やり残しがないように、２学期を終わらせたいと思います。テトルでもお知らせしましたが、インフルエンザ等、風邪症状の子供が増えつつあります。お子さんの体調管理にご配意いただくともに、感染予防対策にも努めてください。

『いのちについて考える』講演会

１１月３０日（木）、講師の先生をお招きし、４・５・６年生を対象に『いのちについて考える』講演会を行いました。ご参加いただけた保護者の皆さんも、ありがとうございました。お話は、概ね以下のような内容でした。

- 長男が生まれたが超未熟児で 772ｇ（500mL ペットボトルとほぼ同じ重さ）だった。生まれつき脳に障害があり、体温調節ができない、一生寝たきりになり、常にお世話が必要になるかもしれないと言われた。私は、子供を育てなければいけないと思い、教員をやめた。
- 二人目を産もうか悩んだが、産む決心をした。次男はいわゆる普通の子であった。母親としての自信、母として生きていけると思った。
- つらいことも多かったが、私が笑顔でいると、子供も笑顔になる。誰かが助けてくれる。前向きな気持ちが大切。命を輝かせてほしい。だから、「勉強が嫌」「喧嘩して苦しい」ときもあるけれど、そんなことに負けないで。「嫌いな人がいるかもしれない」けれど、そんな人にもいいところがある。いいところがあると思って接すると、自分にとってもよいことがある。
- 県内の小学校にお話に行ったとき、いつも「きもい」「死ね」「うざい」と周りを困らせていた子供が「生きる勇気をありがとう。何か寂しくて、友達に振り向いてほしくて、いじわるをした。そしたら友達は、もっと離れていった。

お話を聞いて、自分が変わらなければいけないと思った」と感想に書いてくれた。

・平成１７年、長男が１３歳半ばで亡くなった。悲しくて悲しくて心が折れた。そのときに、カウンセラーの先生から「悲しいときは泣けばよい。苦しいときは叫べばよい」と言われ、心が救われた。今は、小学校の子供たち、障害のある子供たちの支援をしたいと思って、学習支援員をしている。

・次男が「お兄ちゃんがいなかったら、障害のある人にひどいことを言っていたかもしれない。お兄ちゃんがいてくれてよかった」と言って、今、歯科医になろうと頑張っている。

実際の経験に基づくお話は、たいへん心に響きました。お子さんを亡くされた時の気持ちは、想像を絶するものだったと思いますが、それを乗り越えて明るく振る舞い、前向きに生きていらっしゃる姿に感銘を受けました。もっと大勢の保護者の皆さんに聞いてもらえる機会にすればよかったと後悔しました。印象に残ったことがいくつもありました。その一つが「生きていること自体が幸せ」という言葉です。私たちは当たり前のように生きていますが、それは当たり前のことではないということです。また、話す言葉には十分気を付けなければいけないということも強く思いました。軽い気持ちで言った言葉が相手をひどく傷つけていることがあるかもしれません。今、テレビやゲームで簡単に使われている「殺す」「死ね」等の言葉は、けっして安易に使うべき言葉ではありません。

子供たちは、講師の先生の質問に元気に反応しつつも、大事な場面ではシーンとなって聞いていました。その姿から、親が子供を想う気持ちや命の大切さを十分感じてくれたのではないかと思います。子供たちには、命を大切に前向きに生きてほしいと願います。本当によいお話でした。

※１２月４日（月）～１０日（日）は『人権週間』です。８日（金）には、地域の人権擁護委員の方に来ていただき、１～４年生に「友達への思いやり」「人権」等についての読み聞かせをしていただく予定にしています。いろんな人にとって過ごしやすい社会になればよいと願っています。

いつも『校長室の窓から』を読んでいただき、ありがとうございます。しばらくテトルとホームページでお伝えしていましたが、「紙面の方が読みやすい」という声がありましたので、紙媒体でもお届けします。

（校長　　曲　師　政　隆）